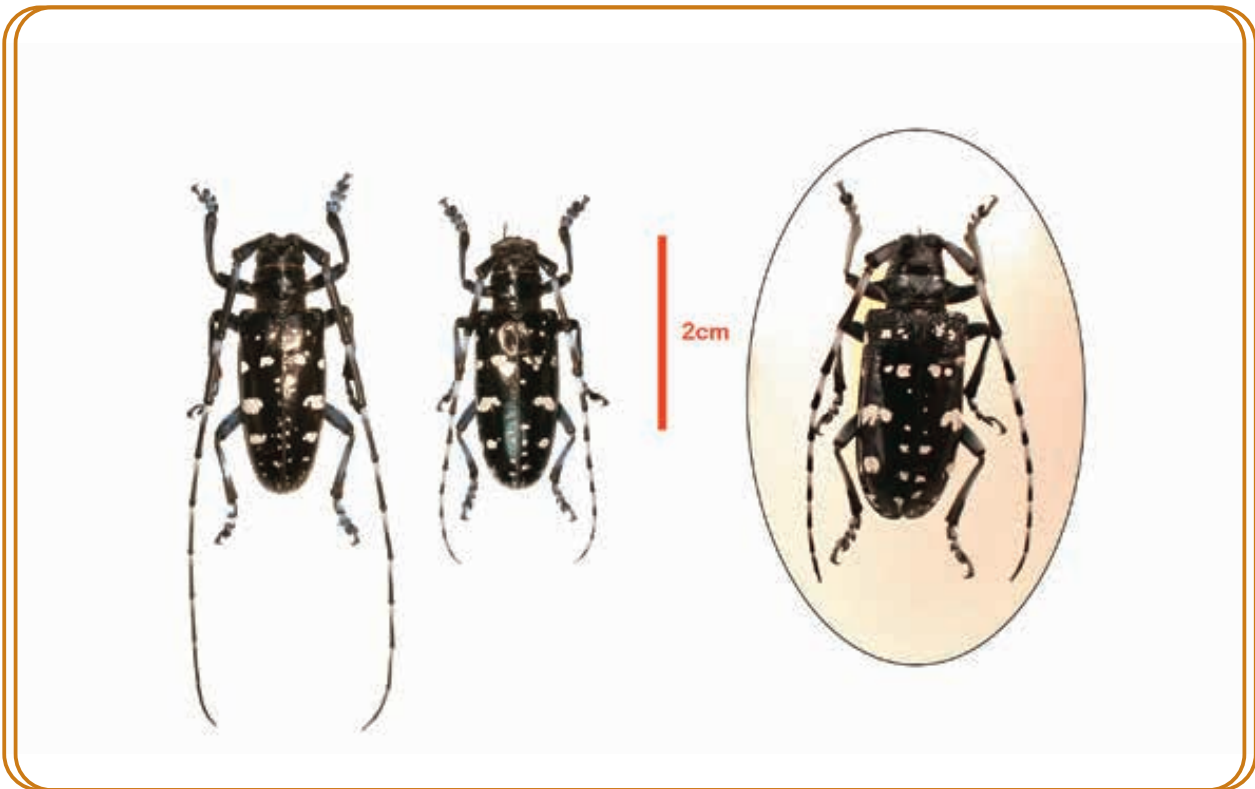


新年おめでとうございます。昨年末には生物多様性条約の締約国会議（COP15）が開催され、本年は新たな国際目標に取り組み始める「新年」でもあります。

30by30などの新たな保全目標はもちろんですが、従前からの課題も重要です。中でも人間の活動によって持ち込まれる外来種の問題では、新たな発見報告が続いています。今号では、今後拡散が危惧される2種の外来種について取り上げます。

## 千葉県内で新たな外来種 ～ツヤハダゴマダラカミキリ～



今回確認されたツヤハダゴマダラカミキリの標本  
左端からの本種のオス・本種のメス、右端は在来種ゴマダラカミキリ

外来種については、日夜様々なニュースが流れてきますが、このたび千葉県内、千葉市内でもそれぞれ新たな外来種の発見報告がありました。まずは巻頭にて、県内で初確認された外来種ツヤハダゴマダラカミキリについてご紹介します。

### CONTENTS

- 1 千葉県内で新たな外来種～ツヤハダゴマダラカミキリ～ ..... 1
- 2 千葉市内で新たな外来種～アフリカツメガエル～ ..... 3
- 3 文化の日環境功労者を表彰 ..... 4
- 4 千葉県の希少種（シロチドリ） ..... 4

## ◎プロフィール

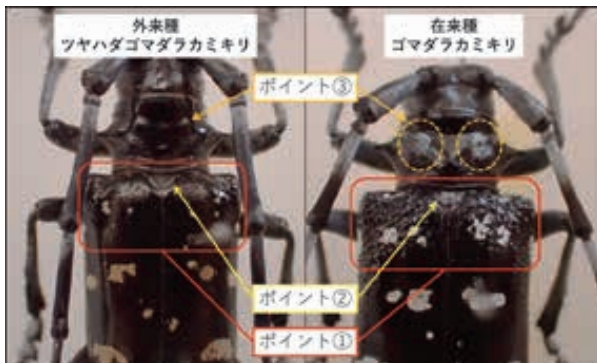
ツヤハダゴマダラカミキリ (*Anoplophora glabripennis*) は、中国・朝鮮半島原産のカミキリムシです。幅広い樹種に被害を及ぼすことから、国際自然保護連合 (IUCN) の「世界の侵略的外来種ワースト100」にも選ばれています。

日本国内においては、令和4年1月までに宮城県、福島県、茨城県、埼玉県、富山県、愛知県、兵庫県、山口県で確認されています。国内ではアキニレ、カツラ、トチノキ、ヤナギ類、エンジュ、カエデ、ポプラなどの樹木が被害木として報告されており、リンゴやナシなどの果樹類にも被害を及ぼす可能性が指摘されています。

千葉県内ではこれまで報告はありませんでしたが、令和4年7月末に野田市内の公園のトチノキ樹上で初めて確認されました。

## ◎特徴と見分け方

ツヤハダゴマダラカミキリは、体長2～3.5cmで、つやつやとした黒色の翅に、20個ほどの白い斑点があるのが特徴です。また触角は白と黒の縞模様で、雄の触角は体長の2～2.5倍ほどの長さがあります。外見は在来種のゴマダラカミキリとよく似ていますが、細かく見ると以下のような違いがあります。



### ポイント1 上翅の付け根に粒状の突起がない

ゴマダラカミキリは、上翅の付け根に粒状の突起があるのに対し、ツヤハダゴマダラカミキリにはありません。この特徴が「ツヤハダ」という和名の由来にもなっています。

### ポイント2 上翅の付け根の間にある三角の部分に白い毛がない

ゴマダラカミキリは、上翅の付け根の間にある三角の部分(小盾板)に白い毛が生えているのに対し、ツヤハダゴマダラカミキリには生えていません。

### ポイント3 首元に白紋がない

ゴマダラカミキリは、首元の中央に2つの白紋が

ある(薄い場合もある)のに対して、ツヤハダゴマダラカミキリの首元には白紋がありません。

## ◎生活史

ツヤハダゴマダラカミキリの成虫は5月下旬～10月ごろに、木に直径1cmほどの穴をあけて幹から出てきます。交尾後、メスは樹皮にすり鉢状のしみ傷をつけ、そのくぼみに1個ずつ卵を産み付けます。成虫は冬を越しません、生涯に雌1匹当たり50個前後の卵を産むと言われています。幼虫はそこから3週間ほどで孵化し、秋から冬にかけて樹木の内側を掘り食べながら成長します。その際、産卵痕からフラスと呼ばれる木くずを排出します。冬の間は卵・幼虫・蛹の姿で過ごし、春になると成虫になって木の外へ出ていきます。



産卵中のメス

## ◎対策など

当センターが現時点で把握している限りでは、県内での発見報告は今回の1カ所のみですが、すでに周辺地域への侵入が進んでいる可能性もあります。拡大を防ぐためには、成虫を捕まえて処分するほか、産卵痕や脱出穴が見つかった被害木は、伐採や薬剤処理、網掛けによる拡散防止などの対策が必要になります。

もし県内でツヤハダゴマダラカミキリと思われるカミキリムシを見かけられた際には、生物多様性センターまで情報をお寄せください。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)

## 千葉市内で新たな外来種 ～アフリカツメガエル～

### ◎アフリカツメガエルとは

アフリカツメガエル (*Xenopus laevis*) は、アフリカ中南部原産のカエルです。一生の間、池や流れの緩い河川などで暮らし、陸に上がることはない水生のカエルです。体長は最大12cmほどで、日本にもともといるカエルたちとは全く異なる、おむすびを潰したような平たい体つきをしています。幼生(オタマジャクシ) もやはり変わった姿をしており、顔にはヒゲがあり、半透明のナマズのような姿です。

このアフリカツメガエルは、飼育が容易で、季節を問わずホルモン注射により産卵させることが可能なことから、1960年代以降、実験用として大量に輸入・養殖されてきました。また、大型熱帯魚の餌としても広く用いられています。



アフリカツメガエルの成体(上)と幼生(下)

### ◎アフリカツメガエルと外来種問題

数多くが流通しているアフリカツメガエルは、1990年代以降、日本各地で野外への定着・繁殖が報告されるようになりました。これは、飼育されていたものが逃げ出したり、遺棄されたもの由来と考えられています。実はアフリカツメガエルは低温にも強く、水が凍らなければ日本国内でも越冬することが可能なのです。千葉県内でも、佐原市

(当時)、神崎町、酒々井町、長柄町、袖ヶ浦市などで、過去にアフリカツメガエルが捕獲されています。繁殖力が強く、水生昆虫や魚類をはじめ口に入るものなら何でも食べるうえ、両生類にとって致死性となるカエルツボカビ病を媒介する可能性も有するこのカエルは、野外に定着してしまうと、在来生態系に大きな影響を与えるおそれがあることから、環境省の生態系被害防止外来種リストにおいて「総合対策外来種」に指定されています。

### ◎千葉市内での発見

令和4年7月、千葉市内の河川において自然環境保全活動を行っている市民団体の方から、種類の不明なカエルに関する問い合わせがありました。送って頂いた写真に写っていたのは、まぎれもなくアフリカツメガエルだったのです。また、その後の聞き取りにより、地元の小学生が、過去に数回にわたってアフリカツメガエルを捕獲していたことも判明しました。10月に行われた調査では、河川のある区間で、わずか20分足らずで13頭ものアフリカツメガエルが捕獲されました。



河川環境(上)と、捕獲されたアフリカツメガエル(下)

この調査では、幼生こそ確認されなかったものの、体長4cmから8cmまでの様々なサイズの個体が捕獲されたことから、既にこの付近において定着の段階にある可能性がうかがえました。場所が河川ということもあり、今後は早期の防除を行うとともに、下流域に拡散しているのかの把握が重要となります。

陸地に上がることもないアフリカツメガエルは、目に触れることもないまま、皆様の身近な水辺にもいつの間にか暮らしているかもしれません。池や川で変わったカエルやオタマジャクシを見つけたら、是非、生物多様性センターまでご一報ください。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

## 文化の日千葉県環境功労者を表彰 手賀沼水生生物研究会と日本電気株式会社

千葉県では11月3日の文化の日に、本県の発展に多大な貢献をされた方々を表彰しています。令和4年の表彰では、希少生物の保護に係る環境功労として手賀沼水生生物研究会と、日本電気株式会社(NEC)の2団体が表彰されました。

手賀沼水生生物研究会は、手賀沼及びその周辺地域の水生生物及びその生育・生息地を保全する長年にわたる取組や、地域住民、行政、大学等の専門機関と幅広く連携し、自然保護意識の啓発に大きく貢献したことが評価されたものです。

日本電気株式会社は、生物多様性行動指針に基づき事業所敷地内の水域を管理するにあたり、絶滅危惧種の保全活動等に尽力され、また、従業員とその家族を対象とした保全活動、大学生による外来種駆除体験、有識者を招いての観察会など、開かれた活動が評価されたものです。

また、両団体はNEC事業所内での活動を協働で進められており、全国でも稀な企業と地域環境団体の協働による保全活動を長期に継続されたことも高く評価されました。生命のにぎわい調査団の皆さんには、3年前の現地研修会で見学したのも記憶に新しいかと思えます(ニュースレター No.63、2019年9月号参照)

表彰のご紹介とあわせて、お祝い申し上げます。

(小野 知樹 千葉県生物多様性センター)



前から2列目、向かって左から3人目が手賀沼水生生物研究会鈴木様、同4人目が日本電気株式会社古賀様

## 千葉県の希少種

### シロチドリ



千葉県レッドリスト：最重要保護生物A。左下は卵

「白千鳥」といっても、別に真っ白いわけではありません。背中と頭は灰褐色をしており、ふっくらとした体形のかわいらしい鳥です。サイズはスズメよりも少し大きいという程度。冬羽では同じチドリ科チドリ属のメダイチドリとよく似ていますが、喉の白い部分が首輪のように後頭部まで回っていることで区別できます。

砂浜や河口、干潟などに生息し、小型の節足動物や貝類を食べて暮らしています。千葉県内では通年見られ、夏季に海岸付近の砂地で繁殖しますが、特に東京湾岸においては、高度経済成長期以降、開発によってそのような繁殖適地が激減し、現在では埋立地で辛うじて少数が営巣しているに過ぎません。2011年の千葉県レッドデータブックの改訂により、ランクが「B(重要保護生物)」から「A(最重要保護生物)」へと引き上げられました。2019年の千葉県レッドリスト改訂においても、そのランクは「A」のまま、依然として厳しい状況にあることに変わりはありません。

生物を保護する際には、その生物だけを守るのではなく、生息可能な環境そのものを保全することが求められます。このシロチドリの場合で言うと、前述の、繁殖や採食の舞台となる砂浜のような場所が併せて確保されることが重要です。

チドリの仲間がチョコチョコと走り回る様子は、「千鳥足」という言葉の由来ともなりました。生き物は人間の文化も背負っており、姿を消すことは文化の損失にもつながります。私たちの後の世代を生きる人々のためにも、シロチドリが走り回るこのできる水辺をずっと引き継いでいきたいものです。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.76 令和5年1月15日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

